様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７０１６２

研究課題名（和文）社会的地域性から見た話術の地域差とその形成に関する研究

研究課題名（英文）A study on regional differences of speech and its formation from the viewpoint of social regionality

研究代表者
澤村　美幸（Sawamura, Miyuki）

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：８０６１４８５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：（１）①狂言や噺本等の日本語史の資料から、上方落語や浄瑠璃等の演芸・芸能に関する資料等、関西の話術を代表する資料から、関西の話術のパターンを分析・考察した。また、関西の中でも特徴的な話術を持つ大阪の形成と歴史について先行研究を参考に分析・考察を行った。②関西地方出身の話者による話術の運用の実態に関する記述調査を実施した。（２）関西の話術との比較という観点から、東京の話術について、江戸時代後期の資料から現代に至るまで文献調査を実施した。（３）現代の韓国語話者の話術についての調査を実施し、書き言葉においても話術の違いが見られる可能性があることがわかった。

研究成果の概要（英文）：(1) ① From the materials of Japanese history such as Kyogen and Konboshi, analyzed and studied the pattern of the Kansai speech from the materials representing the Kansai speech, such as materials on entertainment and performing arts such as upper rakugo and joruri.In addition, we analyzed and discussed the formation and history of Osaka with distinctive talks in Kansai with reference to previous research.② We conducted a description survey on the actual situation of the operation of the speech by the speaker from the Kansai region.(2) From the viewpoint of comparison with Kansai's speech, we conducted a literature survey on Tokyo's speech from late Edo period materials to modern times.(3)We conducted a survey on the speech of modern Korean speakers and found that there are possibilities of differences in speech in written language.

研究分野：日本語方言形成論

キーワード：方言学　日本語学　地域差　方言形成　話術

１．研究開始当初の背景

従来の方言学では、方言とは、音韻・アクセント・イントネーション・文法・語彙・言語行動等の地域による違いとして捉えられてきた。

しかし、小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』で提唱した「言語的発想法」により、各地域では話し方そのものだけでなく、何をどのように言うか、そもそも口にするかしないか、といった言葉に対する発想そのものから、言葉に対する態度や認識に地域差が生じていることが明らかになった。

具体的には、「発現性」・「定型性」・「分析性」・「加工性」・「客観性」・「配慮性」・演出性」という７つについて、主に西日本（とりわけ近畿地方）に強く、東北を中心とする東日本にはこれらが弱いという地理的傾向があることが明らかになった。さらに、こうした発想法の地域差が生まれた要因として、社会環境が言語環境に影響を与え、各地の人間の言語態度（＝言語的発想法）へと作用し、最終的に言語活動（＝ものの言いかた）という現象面の地域差が生じるというモデルを提示した。

先述の小林・澤村（2014）では、さまざまな先行研究をもとにこのような地域差と、それが形成される歴史的過程について論じたものの、各地の言語活動（＝ものの言いかた）にはいかなるパターンが存在するのかについては、「言語的発想法」の東日本と西日本の地域差について、まだ仮説にとどまっている部分もあるため、さらに十分なデータを蓄積したうえで、詳細な分析をしていく必要があると考えられる。

また、これまで行ってきた研究により、社会的地域性が言語活動（＝ものの言いかた）に与える影響は明らかになってきたものの、話術という特定の分野に関して、地域のいかなる社会的・文化的特性の関連が深いかといった点には未だ把握しきれていない部分が大きいということが明らかになった。

すなわち、こうした話術と社会的地域性の関連については、まだまだ隣接科学等との関わりの中で解明していかなければならない部分が残されていると言える。

このような問題意識から、本研究を開始するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、地域の社会構造（＝社会的地域性）が、地域による言語的発想法の違いを生み出しているという観点から、社会的地域性が具体的にどのような言語活動（＝ものの言いかた）や言語運用といった現象面の地域差の形成にいかなる影響を与えているかを究明することにより、日本語方言形成の要因や過程を言語外的側面から解明することである。

とりわけ、言語活動のうち、最も社会的地域性を反映し、地域によって差が出やすいと考えられる「話術」に着目し、各地にどのような話術が存在するのかと、それがどのような意識のもとでいかに運用されているのか、また、その地域差が歴史的にいかにして形成されたものかを解明する。

また、その話術がいかなる地域の社会的性質によって生まれてきたものか、についても、隣接科学の知見を参考にしつつ検証していく。

以上の作業から、日本国内に存在するさまざまな話術を把握し、地域の社会的性質と言語運用の間に働く影響関係についての理論を構築することが本研究の最終的な目的となる。

３．研究の方法

当初の予定では、話術の日本国内の地域差を把握するためには、全国通信調査もしくは複数の地点からなる臨地面接調査による全国的規模の調査が必要と考えられた。

しかし、実際に研究に着手してみた結果、そうした量的な研究をすすめるにはまず、さまざまな言語活動の中で話術とは何かという基本的概念を把握する必要があり、そのためには、日本国内で用いられている話術と思われるものにどのような種類・パターンがあるかを十分に把握する必要があると思い至った。

また、地域ごとのミクロな記述調査等を充実させることによって、話術の地域差の形成の理論的基盤を構築していくことが急務であると判断し、大規模な調査よりも主に文献を中心とした話術の地域差に関する理論の構築が主な方法となった。

さらに、何が各地の話術を生み出す土台となっているのかということに関して、社会的地域性という観点から、〈社会形態〉〈社会組織〉〈産業構造〉等について、特に言語運用への影響が大きいと予測される都市化の程度、集団意思決定の方法、階層の流動性、さらに交通網や貨幣経済の発達等について、民俗学・文化人類学・日本史学・社会学といった隣接科学の先行研究を参照し、地域の社会的性質の総合により、社会的地域性と話術の歴史的発生過程の影響関係について検証する。

また、日本における話術の地域差とその形成に関する要因や過程を明らかにするにあたっては、それが日本という国内で独自に生じた現象なのか、それとも世界で同様の文化・社会構造を持っている地域には普遍的な現象であるのか、すなわち同様の話術が生じてくるものなのかどうか、比較言語学的、あるいは比較文化学的視点からの調査も必要があると考えた。

そのため、日本国内の地域差の形成の問題にとどまらず、韓国や中国など東アジア文化圏の話術、また欧米文化圏の話術と日本人の話術の違いや、違いを生み出す国民性や文化・社会構造の違いが何かといった問題についても並行して調査、分析・考察をすすめているところである。

４．研究成果

日本全国の話術の地域差の形成とその要因については、現在も先行研究や資料などから調査・分析をすすめているところであるため、未だ論文等の成果としては公表していないものの方が多いが、この研究期間中に、本研究によって得られた成果をおおまかにまとめると、以下の（1）～（3）のようになる。

（1）関西の話術と、社会的地域性によるその特質の形成とその歴史的過程について

①日本国内でも非常に独特の発達を見せる関西の話術に着目し、それがいかにして発生してきたものか、狂言や噺本等の日本語史の資料から、上方落語や浄瑠璃等のさまざまな演芸・芸能に関する資料等、現代までの関西の話術を代表されると思われる資料に目を通し、関西の話術のパターンについての分析・考察を実施した。

また、関西の中でも特徴的な話術を持つ大阪という都市がいかにして形成されたかに加え、現代に至るまで大阪という都市がいかなる歴史をたどったかについて、社会的・文化的要因について、隣接科学の先行研究等を参考に、分析・考察を行った。

②関西地方出身の話者複数名による話術の運用の実態に関する記述調査を実施し、その意識に関する詳細な面接調査を実施した。とりわけ、話術に関して日本国内では未発達とも言える東北から関西に移住した話者が、関西に来てからいかに話術の違いに戸惑い、関西式の話術を身に付けるのに苦労したかについて等、数多くのデータを得ており、引き続きこの分析・考察を実施していく予定である。

⇒②①で調査した関西の話術に関する文献調査や面接調査の結果についてはデータベース化を行い、なるべく早めに成果として公開できるように作業中である。

（2）東京の話術と、社会的地域性によるその特質の形成とその歴史的過程について

（1）の関西の話術との比較という観点から、現在日本の首都であり、日本第一の都市である東京ではいかなる話術が用いられているのかについて、江戸時代後期の資料から現代に至るまで、日本語史の資料文献調査を実施している。さらに、江戸から東京という都市が形成された過程やその社会的地域性についても隣接科学の知見にもとづいた調査を実施中である。

（3）日本語話者と韓国語話者の話術について

神戸大学の朴 秀娟氏の協力を得て、日本と同じ東アジア文化圏に属しながらも、文化・社会的特性の面で異なる特徴をもつ現代の韓国語話者の話術について、神戸大学と和歌山大学で大学生を対象とした調査を実施した。調査の結果、おおまかにではあるが、韓国語話者と日本語話者ではメールにおける談話展開が異なる可能性があることが把握でき、話し言葉だけではなく、書き言葉においても話術の違いが見られる可能性があることがわかった。今後も調査・分析を続けていく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①澤村美幸(2016)「方言と位相語—「舎弟」の位相的・地理的変化— 」『日本語学』35 巻 6 号,査読無

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）

①小林隆・川崎めぐみ・澤村美幸・椎名渉子・中西太郎（2017）『方言学の未来をひらく―オノマトペ・感動詞・談話・言語行動』ひつじ書房,（pp.87-pp.205，共著）

②真田信治・友定賢治（編）（2015）『県別　方言感情表現辞典』東京堂出版,（山形県を担当:ページ数算出不可能）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　澤村　美幸（SAWAMURA,Miyuki）
　和歌山大学・教育学部・准教授
　研究者番号：80614859

(2)研究分担者
　　(　　)

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　(　　)

　研究者番号：

(4)研究協力者
　　(　　)